

熟年俳句誌

8 2013年
月 号

かたね

ふ



黒羽集

(二十一)

佐藤喜仙



青鷺の一瞬にして嘴に魚

建てつけの悪しき戸を締め五月尽

新築の庭はや蟻の国土なる

バルコニー湯あみのほてりはなちけり

蛇口からほとばしる水夏きざす

右ばかり綻ぶ軍手極暑かな

タンデムの呼吸の合はず梅雨晴間

襟元を少し広げて更衣

地下道のあまりに長く浮いて来い

この街にひと振り向かす日傘かな

居間として客間としての夏座敷

ビヤガーデン枝豆どかと置かれけり

かきね集

白選句集



「牛蛙」

松本周二

拡げゐる孔雀の尾羽薄暑光

天の声の響きのごとき牛蛙

誘惑の深紅の玉の蛇いちご

大牡丹猫四五ひきの侍りをり

花栗のにほひ里山支配せり

豊かなる蛇行の川や麦の秋

「豆御飯」

古川千鶴

分かちあふ仮設住まひの豆御飯

一杓の涼賜りし神の杜

サーファーを乗せて怒濤の波頭

川の無き島の段畑パイナップル

億年の艶そのままに油虫

賞罰の無き人生や葱坊主

「夏来たる」

川井素山

走り梅雨揺れて地を掃く枝の先
夕立や蛇の目の猪口のうすき色
滝の音孫の手を買ふ茶店かな
花の名を母に問ふ子や夏帽子
登校の白一色の梅雨晴間
縁側に残る玩具や夏の暮

「若葉風」

安藤虎酔

はればれと心を癒す若葉風
木守柿鳥のめぐみとなりにつけり
風鈴の音に誘はれ子の寢息
言葉なく鍬振る人の汗みどろ
滝風やしぶきのこんな所まで
秋茄子の辛子漬ほめのれん酒

「夏風景」

田島昭久

立葵真すぐ伸びて丈比べ
鉢植糸の花盛りなり夏の蝶
日射し強し新緑ますます輝きぬ
紫陽花の紫映えて雨の中
野鳥等が水浴びに来る盛夏かな
梅雨晴間仕事多くて主婦走る



撫子集

主宰選



米田文彦

盛塩に湿りの見ゆる梅雨の店

水盤に客を迎ふる花菖蒲

カーテンの引かれしままに梅雨に入る

屋上の菜園に人梅雨晴間

紫陽花の盛りあがる藍線路脇

薫風や遠まはりする散歩道 長久保郁子

人の手を借りてボートに乗りこみぬ

花袴尼僧と伴に見上げゐる

木隠れの人待ち顔や夏帽子

樹は空へ滝は地上へまつすぐに

小池清司

子燕の天こ盛りなる雨の駅

透明な斧振り上ぐる子かまきり

十葉の花の眩しき退院日

梅雨晴間雲遊ばせる水鏡

聞き倣しや土は洩いと夏燕

青木英林

雨上り揺るる葉陰に蝸牛

道の端に佳人の如く立葵

黄昏に蝙蝠の飛ぶ風呂帰り

夕立や熱戦続く甲子園

枇杷を喰ふ邪馬台国は何処にぞ

雪吊の雨に濡れゐる春隣

山本 達人

花冷えや酒と肴を友にして

やまかひに春日輝き土薫る

梅檀の花の豊かや寺詣

蛾の来れば優しく払ふ友の通夜

どこまでも真直な道揚雲雀

岡野 安雅

いか釣り火砂丘に登り数へけり

二人づつ砂浜に影遠花火

池越へのシヨートホールや蛇の衣

隠し味拵がる旨さ床料理



那須野集

主宰選



早暁の紫陽花光る雨上がり

丸山酔宵子

夾竹桃角の煙草屋代替り

小柳千美子

幹くねり枝先池面に百日紅

古代蓮浮葉に光る日照雨かな

採りたての胡瓜塩もみ冷し酒

刈込みの園丁に乞ふ未央柳

朴葉添へ削り節かけ冷奴

木漏れ日の探し当てたる花石榴

畦道や気づけば青田の海の中

紫陽花の庇となりて塞の神

幾霜に墓碑荒びたり栗の花

池内とほる

開け閉めの軋み卯の花腐しかな

橋本修平

霾ぐもる筑後平野の大河かな

山道に藤散り敷くや賤ヶ岳

まくなぎを払ひ払ひて夕の道

岩窪の祠の脇に墓

ががんぼの足滑らせしガラス窓

木陰にて帽子を脱げば蟬時雨

老いてなほみずみずしきや柿若葉

本丸を囲む空濠茂りけり

和田勝信

薔薇園を出づるや市井笑ひ声

田中清秀

越後には畦に菖蒲の並びをり

通し鴨体を揺すり歩みけり

廃屋に覆ひ被さる夏木立

夏暖簾狸の像の首傾げ

母と剥く蚕豆の莢ざる溢る
会釈して紫陽花の径すれ違ふ
紫陽花の白多くして寺の苑

雨上がりによりりと出でし墓の蛇

傘二つ動かぬままの花菖蒲

柳田皓一

夕立に洗はれ小坪の緑ます

吉田博行

ぬかるみに足元ばかり菖蒲園

黄の花は片隅に咲けり菖蒲園

新品種ご当地名の花菖蒲

しほれたる菖蒲の花の白のすぢ

夕立や道行く人も足速に
梅雨晴れやくつきり見ゆる八ヶ岳
凜として水辺に映ゆる花菖蒲

花菖蒲水に映せる花のいろ

緑雨やみて小虫とびかふ深大寺

森岡陽子

植木屋が高みに居りぬ緑さす

長島清山

道端に小粒ころがり青い梅

声援に駆ける優駿芝青し

尾根道の天空カフェの若葉風

雨あとの古刹の紫陽花雫たる

ブレザーは兄の形見や更衣

鷹の羽火の鳥となる夕日かな

被曝の地北の地にもあり三一一忌

時計草支柱接ぐことからむ蔓

後藤克彦

夕立や蚊取りの煙消へて行く

青田時一雨毎に鳴く蛙

シヤボン玉隣の塀も超え切れず

早朝の蟻の行列餌を運ぶ

撫子集・那須野集鑑賞六月号より

客員 村上克哉

撫子集

散髪の缺の音や夏近し

米田文彦

ゴールデンウィークの連休が始まるといよいよ夏がやって来る。花は散り尽くし若葉が山を彩り、北国では桜をはじめ花が一斉に咲き、遅かった春を一気に取り戻す。日に日に光も眩しく爽快な気分。散髪の缺の軽快なりズム、シャキシャキと切れ味のいい缺の音につい眠気を催す夏近しの爽快な気分が伝わってくる。

なはとびの縄草萌えの地を打てり 長久保郁子

早春になると道の傍ら、岩の隙間や野にも庭にも萌え出た草の芽の淡い緑は、いかにも待ち焦がれた春が来たと言う感が深い。草萌えは本位季題「下萌え」の傍題であるが、草の方に比重のかかった「草萌え」を選び、縄跳びに興ずる子供たちの元気な情景が伺え「地を打てり」の下五が如何にも春らしい。

黄蝶飛んでやがて菜花に紛れけり 小池清司

菜の花にとまるモンキチョウやキチョウは身動きもせず蜜を吸い、やがて次の花へと舞い上がる。目に染みる黄色の菜の花畑のあちらこちらでよく見かける光景。下五の紛れけりで詩情が広がる。俳句大辞典に「菜花蝶に化す」と言う季語がある。

(以下略)

伝言板

1 第二十回本部句会(原則第二金曜日)

①日時 2013年8月9日(金)

14:00~17:00

②場所 目黒区「下目黒住区センター」

3階会議室

③投句 当季雑詠 5句

④会費 1000円

2 第二十一回本部句会

①日時 2013年9月13日(金)

14:00~17:00

その他事項は第二十回に同じ

3 第二十回吟行 (原則第四火曜日)

日時 2013年8月27日(火)

場所 井の頭公園

集合 JR中央線「吉祥寺駅南口」

改札出口 11時

句会場 三鷹産業プラザ4F会議室

昼食 各自用意

出句数 囀目3句

費用 交通費各自負担。会場費均等割り

申込 喜仙宛8月20日まで

(FAX又はTEL)

4 第二十一回吟行

日時 2013年9月24日(火)

場所 佃島界わい

交通 有楽町線・都営大江戸線月島下車

集合 都営大江戸線月島改札出口

11時

句会場 佃区民館を予定

昼食 月島の「もんじゃ焼き」

出句数 囀目3句

費用 交通費・昼食代各自負担。会場費均等割り

詳細は次号にて

5 「かさね」友の会の皆さん

投句をされる時、裏面に「友の会の声」欄がございますので、句評、近況

報告、ご意見などご自由にお寄せください。

なお友の会の皆さんは特別作品(十句)、随筆、その他論文等をいつでも投稿することができます。お待ちいたしております。

会員募集

何時からでも「かさねの友」になれます。

年会費 12000円(前納)

ただし年次途中入会者

は入会申し出の翌月より

12月まで月割りで納付

見本誌 400円(切手可)

見本誌請求先

15210033

東京都目黒区大岡山2-7-5

かさね俳句会 佐藤喜仙

「かさね」俳句の基本

I 前提

- 一、俳句は世界最短の「詩」である。
- 二、有季・定型・文語体を旨とする。

① 「詩」とは

水原秋櫻子が俳誌「馬酔木」の昭和六年（一九三一年）十月号に載せた「自然の真と芸術上の真」より抜粋

「ただ自然の真だけを追求したところで詩人たる資格はない。心を養い、主観を通して見たものこそ文芸上の真で、これを尊ぶ人が詩人である」

② 有季の原則

原則①

「季語とは累々と先達が磨いてきた季節を表す言語群であり、歳時記により集大成されている」

原則②

「季語が一句の中で使われ、その句の季節を明確に表出する時、その季語を「表季語」と称する」

原則③

「一年を通して存在する現象、あるいは事物が季を定められている語彙の場合、その定められた以外の季節においてはその語彙は季語とは見做さない」

原則④

「季重なりとは同季に属する季語を一句の中で二語以上重ねて使用する場合をいう」

原則⑤

「例えば絵・版画・掛け軸・屏風・襖絵等に描かれた、通常季語と見做される花鳥等は、季感がないので季語とはみなさない。同様比喩に使われている通常は季語である語群もやはり季感が無きがゆえに、季語とはみなさない」

③

文語体について

俳句は韻文であることを守るため文語を使用し、用言においては歴史的仮名遣いを必ず使用することとする。

II

俳句の約束事

一、切れ字（十八字）を使い俳句にメリハリをつける。

現在切れ字とされている文字は、や、かな、けり、もがな、し、ぞ、か、よ、せ、れ、つ、ぬ、へ、す、いかに、じ、け、けん。

二、表現

主観を直接表現せず、具象表現を使うことにより、自分がその一句の中で言いたい主観を暗示の形で言い表す。

三、地名・固有名詞

地名・固有名詞は一句の中にあつて季語に次ぐ重要な働きをするが、一句の中で使用する時は少なくとも大方の俳人が知っているであろう地名・固有名詞にとどめる。

四、三段切

形は三段切でも言わんとする内容が繋がって居れば良しとする。

例 完全な三段切 奈良七重七堂伽藍八重桜 芭蕉

三段切でも可 初蝶来何色と問ふ黄と答ふ 虚子

五、前書・ルビ

前書は慶弔の句にのみゆるされる。

ルビは誌中では使用しない。

III

俳句の作り方……山口誓子

私の俳句の作り方を、図式で現せば、至極簡単である。感動が先立たねばならぬ。事物と出会って思わず「ああ」と叫ぶその叫びから、俳句は生まれるのである。